

## 全労済協会 中央大学法学部公開講座

### 「福祉と雇用のまちづくり

～誰もが働き暮らし続けることができるまちづくりへ～

第7回 2022年6月1日

#### 「子ども食堂が開く未来」

認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ理事長、  
社会活動家、東京大学特任教授 湯浅誠 氏

#### ■企業にとって社会貢献であり経営問題でもあるこども食堂の支援

NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえの理事長で、こども食堂の支援をしている湯浅です。2019年までは法政大学の教授として授業やゼミで学生の皆さんと接する機会が多かったのですが、今は東京大学に移り、先端科学技術研究センターの特任教授となって学生と話す機会が減ってしまいました。ですから、今日这个机会を楽しみにしてきました。

まず、いま非常に多くの企業がこども食堂を支援してくれているということから話を始めます。例えば、イオン、吉本興業、ファミリーマート、スターバックスといった皆さんがよく知っている企業から、超高級時計のリシャール・ミルのような企業まで、多くの企業がいろいろなやり方でこども食堂を支援してくれています。こうした企業は、何を応援しようとしているのでしょうか。全国こども食堂応援募金を実施してくれたイオンのプレスリリースには、次のような一文があります。「共助の絆で結ばれる活気と喜びにあふれる地域コミュニティづくりに取り組んでまいります」。このお金で恵まれない子にご飯を恵んであげます、とは書いてありません。私たちは、こども食堂を応援するということは地域コミュニティを作るということだと訴えており、イオンのプレスリリースは、そのことを理解していただいている一例です。こども食堂を地域交流の場だと考えると、例えばファミリーマートが関わっている理由もわかると思います。コンビニエンスストアは全国で約5万店舗あり、人口が減る中で淘汰の時代になります。その中で生き残るためには、これまで以上に地域と密着することが必要なのです。地域コミュニティ作りは社会貢献であり、同時に経営問題だと考える企業が、続々とこども食堂を支援してくれているのです。

#### ■こども食堂とは参加条件のない公園のような場所

こども食堂は、2021年時点で全国に6,014箇所あります。感染症が蔓延する中でも減らず、ここ数年は毎年1,000箇所以上、増えています。その背景にあるのは北海道から沖縄まで各地の皆さんが感じている「うちの地域、寂しくなったな」という感覚です。自分の地域をなんとかしなければと考える人たちが、こうした場を作っているのです。

こども食堂の約2/3には、子供だけでなく高齢者の方も来ています。こども食堂という名前ですが、全世代が参加する場であり、参加条件はありません。こども食堂は、公園のような場所なのです。小学校や中学校、大学など多くの場所にある「関係者以外、立ち入り禁止」という張り紙がありません。0歳の方も100歳の方も、健常者も障がい者も、日本国籍の方も外国籍の方も、どなた

でもどうぞという場所です。こうした場が、何の取り決めもせずに全国で示し合わせたように増えているのです。

### ■貧困対策としてのこども食堂

こども食堂の写真を見ていただくとわかる通り、その場にいる人々は、誰も困っているように見えません。これで貧困対策として機能しているのかと思う人もいるかもしれませんが、実はそこがとても重要なのです。皆さんは「学生相談室」に行っていますか？ あそこに行くほど困っていないという人が多いのではないかと思います。相談できる場所があっても、実際に相談に行くというのはなかなかハードルが高いのだと思います。私は、社会活動家として相談を受ける側の仕事に長く携わっており、「なぜもっと早く相談にこなかったのか」と悔しい思いをしたことが数えきれない程あります。相談をたらい回しにされないようにワンストップ化する、対面せずに SNS で相談できるようにするなど、相談の敷居を下げる取り組みをいろいろと行ってきて、それぞれに意味があったのですが、同時に限界も感じました。そこで「どうやったら早く相談に来るようになるのか」ではなく、「この人たちはどこならば行くのか」と、発想を変えたのです。すると、彼らは公園や、地域のお祭りなど、「自分には課題がある」と言わなくても良いところには行くんですね。例えるなら、何の問題もないよという「青信号の顔で行ける場所」には、黄信号の人も来るんです。「大変な人は来てください」という場を作ると、黄信号の人が「自分はまだ赤信号じゃないから行かなくていいや」と思ってしまいます。青信号の顔で行ける場所、それがこども食堂なんですね。何の問題もないように見えて、笑うと歯が無かったり、楽しく過ごしていたのに帰りの時間になるとぐずり出すような、黄信号の人たちに気づくことができるんです。

行政の場ではないところで行われているということも、重要です。行政では、本人をアセスメントして、自立支援計画を立てて、計画の実行をサポートします。そういった取り組みが必要な人たちがたくさんいるのは事実なのですが、一方ではそういう支援の仕方とは違う、「隣のおじちゃん、おばちゃんのおせっかい」のような支援が良い場合もあるのです。こども食堂は、黄信号の人が来ることができる場であるということが強みですが、集団検診のように黄信号の人をあぶりだして調べる場ではありませんし、引きこもりの人の問題に気づくことはできません。こども食堂も万能ではないのです。貧困対策は、それぞれの強みを活かしながら組み合わせるべきで、こども食堂もその一つだということです。

### ■子供を見守り、励ます「居場所の力」

こども食堂のような場が必要なのは、貧困の子だけではありません。例えば、こども食堂で漢字ドリルを使って勉強をしていた小学校4年生の女の子が、家庭では見せないような集中力を発揮して、一緒に来ていたお父さんが驚いたということがありました。また、「家では決して食べないものを、こども食堂に行くと食べてくれる」という話もよく聞きます。これらは一体、どういうことなのでしょう。こども食堂では、野菜を食べろ、煮物を食べろと口うるさく言うわけではありません。

私は「居場所の力」と呼んでいるのですが、子供は周りの人に見守られていること、励まされることによって、家では発揮できない力を発揮できるのです。勉強を教えてくれる、教えてくれなくても励ましてくれる、励ましてくれなくてもちゃんと見ていてくれる、そうしたことを感じると、

人間は頑張るのです。反対に、誰も見てくれないと人間は手を抜きたくなったり、自棄になったりします。貧困家庭の子ではなくても、こども食堂に行く意味はあるのです。

<文責：全労済協会調査研究部>